

2018 年 11 月 18 日（日）「柔和なる王の入城」

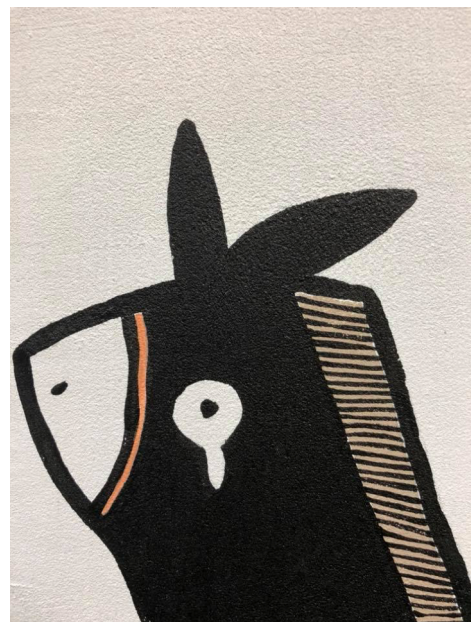
マタイ 21:1-11

1 それから、彼らはエルサレムに近づき、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来た。そのとき、イエスは、弟子をふたり使いに出して、2 言われた。「向こうの村へ行きなさい。そうするとすぐに、ろばがつかがれていて、いっしょにろばの子がいるのに気がつくでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい。3 もしだれかが何か言ったら、『主がお入用なのです』と言いなさい。そうすれば、すぐに渡してくれます。」4 これは、預言者を通して言われた事が成就するために起こったのである。5 「シオンの娘に伝えなさい。『見よ。あなたの王があなたのところに来られる。柔和で、ろばの背に乗って、それも、荷物を運ぶろばの子に乗って。』」6 そこで、弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにした。7 そして、ろばと、ろばの子とを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。8 すると、群衆のうち大ぜいの者が、自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの人々は、木の枝を切って来て、道に敷いた。9 そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。」10 こうして、イエスがエルサレムに入られると、都中がこぞって騒ぎ立ち、「この方は、どういう方なのか」と言った。11 群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレの、預言者イエスだ」と言った。

【序論】

目がやさしいロバの子よ
食べ過ぎて腹をこわすな
はね過ぎて足いためるな
王の王なるイエス様を
お乗せするご用があるのだから

目がやさしいロバの子よ
呼ばれたならばすぐさまに
ついてゆける用意をせよ
王の王なるイエス様を
お乗せするご用があるのだから



画：本多守

目がやさしいロバの子よ
選ばれたこのほまれを
喜び勇みて進めよ
王の王なるイエス様を
お乗せするご用があるのだから

「瞬きの詩人」と呼ばれた水野源三さんの『こころの散歩』という詩の中にある「ロバの子よ」から引用させていただきました。私がこの詩にふれたのは、もう 10 年以上前だったと思います。ある教会のコンサートで、イエス様の生涯を綴った水野源三さんの詩が音楽として公演されたのです。その中で、あどけない少年がこの曲をソロで歌ったのを印象深く覚えています。この詩は主イエスのエルサレム入城の場面を歌ったもので、十字架に架かる直前の「受難週」に、主に選ばれた子ロバの役割を綴ったワンシーンであります。数多くいるロバの中から選ばれた一頭の子ロバの特権に目を留めるのも、一つの視点です。主イエスがその小さなロバに乗っておられる姿をイメージしつつ、今日の箇所を学んでいきたいと思っています。

【本論】

本論 1. ロバの子を借りる意義

それから、彼らはエルサレムに近づき、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来た。(21:1a)
エリコの盲人の癒しの出来事を経て、主イエス一行はいよいよエルサレムに到達しようとしています。ガリラヤから来た多くの群衆が付き従っていたようですが、その目的は過越の祭の巡礼にほかなりません。しかし、主イエスの心の中には単なる参拝者としての意識があったのではなく、ご自身が犠牲の動物（神の怒りが過ぎ越すための小羊）になるという決意がありました。主イエスは神の国の王としてエルサレムに入城されるのですが、同時に屠られる羊でもあられた。エルサレムとはイスラエル宗教の総本山であり、神殿が^{そび}え立ち、まさにメシヤを迎えるべき地であります。まことの王、まことの犠牲の羊なる主イエスを如何にお迎えするかが真に問われていたのです。

「ベテパゲ」という地は、旧約聖書にも出てこない無名の地ではありますが、「熟していないいいちじくの家」という意味で、いちじくの木が多く生えている様子が窺えます。

「オリーブ山」もメシヤが降り立つと信じられていた象徴的な山で（ゼカリヤ 14:4）、その付近を主イエスが通るところには、やはり意味深長なものを感じます。

そのとき、イエスは、弟子をふたり使いに出して、言われた。「向こうの村へ行きなさい。そうするとすぐに、ろばがつながれていて、いっしょにろばの子がいるのに気がつくでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい。もしだれかが何か言ったら、『主がお入用なのです』と言いなさい。そうすれば、すぐに渡してくれます。」(21:1b-3)

これまでの旅はずっと徒歩だったと思われそうですが、主イエスはここに来てロバに乗ってエルサレムに入城しようという提案をなさいます。これは考えてみれば、敢えてする必要のないデモンストレーションであって、その行動自体に何らかの意味を持たせた「パラブル」なのです。主イエスの念頭には次の預言があったと思われま

これは、預言者を通して言われた事が成就するために起こったのである。「シオンの娘に伝えなさい。『見よ。あなたの王があなたのところに来られる。柔和で、ろばの背に乗って、それも、荷物を運ぶろばの子に乗って。』」(21:4-5)

これはゼカリヤ 9:9 に描かれている預言で、メシヤが来た暁には、ロバの子に乗って「シオン」(エルサレムの女性的表現)に入られるであろうということが言われていた。この約束は聖書を知るユダヤ人にとって馴染み深いものであり、主イエスはご自分をこの預言に重ね合わせる形で作為的な行動を取られたのです。では、なぜロバなのか。ロバは、古代オリエントでは旅行や運搬に用いられた動物であります。ソロモン王の時代には大量の馬が輸入されましたから(Ⅰ列王 10:28)、その後の時代に王侯貴族の間でロバが使われたという記録はないのです。ロバは「軍馬」ではなく、平和と結びついた動物とされていました。主イエスはこのロバを選び、「平和の君」として入城されたのであります。

さて、ここで主イエスは二人の弟子を遣わしてロバを借りて来させます。主イエスは、弟子たちとロバの持ち主との間で交わされるであろうやりとりを予知されているようです。二つの可能性があるでしょう。

① この時代、一般的に家の前にはロバがつながれていたもので、必ずロバがいることを想定して語っておられる。

② 主イエスは知り合いに事前にこの計画を話して頼んでおかれた。

はっきりとしたことは分かりませんが、私自身は後者ではないかと考えております。マタイは「ロバの子」とその「母ロバ」の二頭が連れて来られたことを明らかにしています。主イエスが敢えて「子ロバ」に乗ろうとしておられるのは(マルコ 11:2 では「**まだだれも乗ったことのないろばの子**」)、この真新しい家畜が「神に聖別されたもの」としての意味を持っていたからです。主イエスはそのロバの子に乗り、一面ご自身を王として人々に示される(母ロバは子ロバの安心のために一緒に連れて来られたのでしょう)。しかし、それはまことに控えめな方法によってであります。実際に主イエスの意図を悟

ることのできる人はほとんどいないかも知れません。「このたとえの意味を考えてみよ」「私が何者であるか、目のある者は見よ」というメッセージが込められた、一つのパフォーマンスなのです。

ここで「パラブル」というものの性質を思い起こしていただきたいのですが、これは神の国の真理を身近な事柄によって示し、それを見る人、聞く人の心にメッセージとして語りかけるものです。しかし、それを見ても聞いても、人には何のことだかさっぱり分からないということもある。分かる人には分かる。この違いは何によって生じるかといえ、それは信仰の目で見ると、肉の目で見るとかなのです。ロバの子に乗る王の姿は、言ってみれば「力強い王」らしくはありません。とてもローマ帝国を打ち破る力を発揮してくれる王には見えないのです。しかし、主イエスはまことの平和を世にもたらす王としてご自分を提示された。そして、この方を信じるかどうかは、一人一人に委ねられた信仰の応答なのです。私たちにもそのことが問われております。

本論 2. エルサレムの人々の反応／群衆の出した結論

そこで、弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにした。そして、ろばと、ろばの子とを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。

(マタイ 21:6-7)

「上着を掛ける」という行為は、即席の鞍を用意したという意味でしょう。実にささやかではありますが、主イエスは王としてご自身を表されたのです。

すると、群衆のうち大ぜいの者が、自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの人々は、木の枝を切って来て、道に敷いた。そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。」(21:8-9)

さて、ここに主イエスを迎える群衆が登場します。具体的には書かれていませんが、二種類の群衆が混在していると思われます。第一に、主イエスと共にガリラヤからやってきた人々。彼らはガリラヤでの主イエスの活動を知っており、その教えと奇跡の数々にふれてきました。第二に、エルサレムに住んでいた人々です。彼らはまだ主イエスのことをそこまで知らない人々であり、言わばこの人々が主をどのように迎えるかが注目されているとも言えるでしょう。

道に上着を広げ、木の枝を切ってきて道に敷いた人々というのは、ガリラヤからの群衆かも知れません。ここには何か熱狂的な雰囲気があるのですが、主イエスに対する並々ならぬ期待が感じられます。彼らの思惑とは、恐らく主イエスが本来意図しておら

れる「柔和なる王」としてのアイデンティティを理解したものではなく、自分たちの生活を圧迫し、強大な軍事力をもって制圧しているローマ帝国に反旗を翻す王としての期待でありましょう。米国の大統領選には世界が注目しますが、主イエスはそのように「世を変える王」としての期待がかけられたのです。それは一面において正しかった。主イエスは確かに「世を変える王」なのです。しかし、その方法は群衆も弟子たちも想像もつかないような方法。世に棄てられ、十字架で殺される王。そして、すべてを失った上で、神の力によって甦り、新しいいのちを多くの人に与えていく王であります。このような主イエスの計画を理解できた人は果たして一人でもいたのでしょうか。人々はロバに乗った主イエスを、どこことなく頼りない違和感を覚えつつも、「俺たちのこれからの命運をこの人に賭けてみよう！」という思いで棕櫚の枝を振ったのではないのでしょうか。

群衆の叫びにも注目してみましょう。「**ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に**」。「ホサナ」とは、元々ヘブライ語の「ホーシアンナー」という「我らを救い給え」という意味の言葉が、アラム語に音訳されたものです。当教会の「ホサナクラブ」「ホサナ歌声同好会」などは、「我らを救い給え」という神への賛美が込められた名称であります。しかし、当時は「万歳！」というニュアンスを含み、王的人物を迎えるにあたって叫ばれたようです。主イエスがエルサレムに入城されるや、たちまちローマ帝国の政治的支配は打ち砕かれ、ダビデの時代のようなイスラエルの王権が復興することが期待されたのです。

こうして、イエスがエルサレムに入られると、都中がこぞって騒ぎ立ち、「この方は、どうい
う方なのか」と言った。群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレの、預言者イエスだ」と言
った。(21:10-11)

主イエスがエルサレムに入られると、エルサレム中が騒いだとあります。この騒ぎの意味を考えてみましょう。これは喜びの騒ぎではありません。「ガリラヤから来た群衆がこんなにももてはやすこの男は一体何者なのだ？」という騒ぎであります。主イエスは公生涯において何度かエルサレムを訪れたと思われますが、このエルサレムは全体として主に敵対する町として描かれている。その典型は、主イエスが誕生された時の出来事です。東方の博士たちが救い主の誕生を知って訪れたとき、「**ヘロデ王は恐れ惑った。エルサレム中の人も王と同様であった**」(マタイ 2:3)とあるように、彼らは喜ばず、むしろ震撼したのです。ここでもやはり、エルサレムの群衆は主イエスを歓迎してはいない。そして、彼らは「この男は一体何者か」と問うのですが、それに対するガリラヤの群衆の答えにも釈然としないものを感じます。彼らは「この方こそキリストです」とは言わない。「**ガリラヤのナザレの、預言者イエスだ**」と、まことに小さく見積もった返答をしている。ガリラヤの群衆はエルサレムの群衆の不信仰に吞まれてしまっているかの

ようです。

このように、キリストに対する信仰告白に消極的になるという姿勢は、私たちの内にもないでしょうか。いつでも大胆に自分がキリスト者であるということを明言しているか。ガリラヤの群衆の姿勢から、そんなことを考えさせられるのです。

【結論】

主イエスのエルサレム入城は、私たちの心の王座に入ろうとしておられる主イエスの思いを象徴しているでしょう。私たちの心は城門であり、その扉は叩かれているのです。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(黙示録 3:20)

私たちは「平和の君」なるイエス・キリストを理解し、この方を真に迎え入れているでしょうか。自分の思い通りの救い主を求めているとするならば、私たちは未だ心の城門に鍵をかけていることになるでしょう。私たちがどのような人生を求めているか、主イエスのように生きたいという渴望があるかどうか、その試金石となります。今一度、自分の人生観を振り返り、福音に生きることを求めたい。そして、信仰による「ホサナ」をもって、主イエスをこの心に迎え入れましょう。

その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手にとって、御座と小羊との前に立っていた。彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」(黙示録7:9-10)

【祈り】

王の王なるイエス・キリストの父なる神様。主イエスは柔和を身に纏ってエルサレムに入城されました。ロバの背に乗った主の心の内には、「私が誰であるかを見定めよ」という叫びがあったことでしょう。しかし、主は手を振ることもなく、口も開かず、まるで屠られる小羊のようにエルサレムに入って行かれました。人々がどのように反応しようと。私たちに信仰の目、信仰の耳を与えてくださり、このお方を心に迎え入れ、住んでいただくことができるようお導きください。そして、私たちが主イエスの人格を宿し、真に柔和な生き方ができるように、助けてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

来たるべきメシヤを「柔和なる王」と定め給うた、父なる神の愛。

ゼカリヤの預言の通り、子ロバの背に乗って、エルサレムに入城し給うた、主イエス・キリストの恵み。

信仰の目で、神の国の王を悟らせ、心のエルサレムに主イエスを迎え入れさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。